

D オリンピック・パラリンピックのイメージ

明治大学 政治経済学部

教授 高峰 修

はじめに

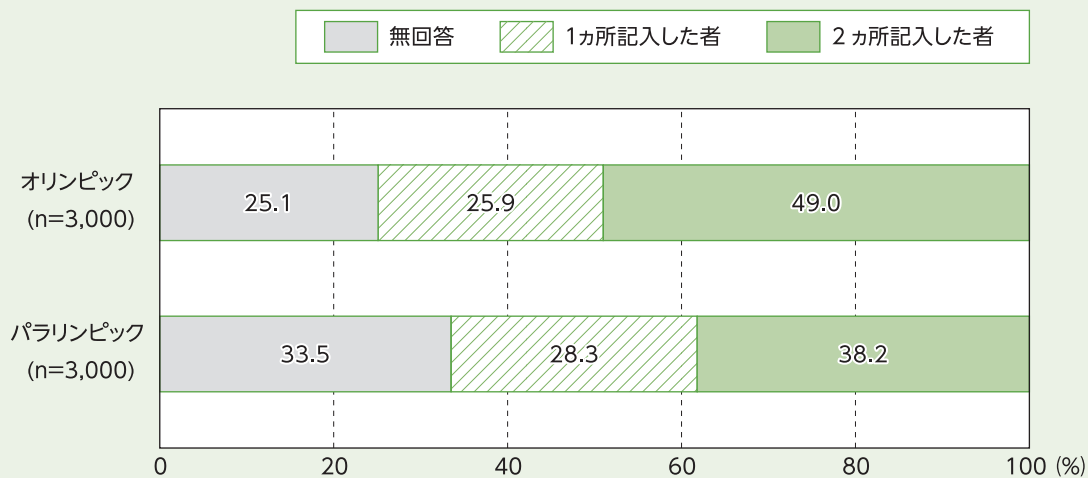
オリンピック競技大会の特徴のひとつは、背景に「オリンピズム」という理念があり、大会の開催は理念達成のために展開される「オリンピック・ムーブメント」という一連の社会運動に位置づけられている点にある。オリンピックを一都市で開催し、成功に導くということは、その都市の住民や、その都市がある国の国民による「オリンピズム」や「オリンピック・ムーブメント」の深い理解によって裏打ちされると思われる。

4年後に東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えた現時点で、わが国の国民はオリンピックやパラリンピックに対してどのようなイメージをもっているのだろうか。そこに「オリンピズム」や「オリンピック・ムーブメント」の姿はみられるのだろうか。本稿では、18歳以上の男女がオリンピックやパラリンピックに対して抱くイメージについて量的、質的に検討した。

D-1 オリンピック／パラリンピック・イメージへの回答

オリンピックとパラリンピックのイメージについて、それぞれ回答欄を2カ所用意し、自由記述によって回答を求めた。図D-1には、2カ所の回答欄に対する回答数の分布を示した。2カ所の回答欄のいずれにも回答した者の割合は、オリンピック・イメージは49.0%であるのに対し

て、パラリンピック・イメージでは38.2%にとどまり、10ポイント以上の差がある。また、オリンピック・イメージでは25.1%の者が無回答であったが、パラリンピック・イメージでは33.5%であった。パラリンピック・イメージに比べてオリンピック・イメージへの回答が多い結果となった。



【図D-1】 オリンピック／パラリンピック・イメージへの回答

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

D-2

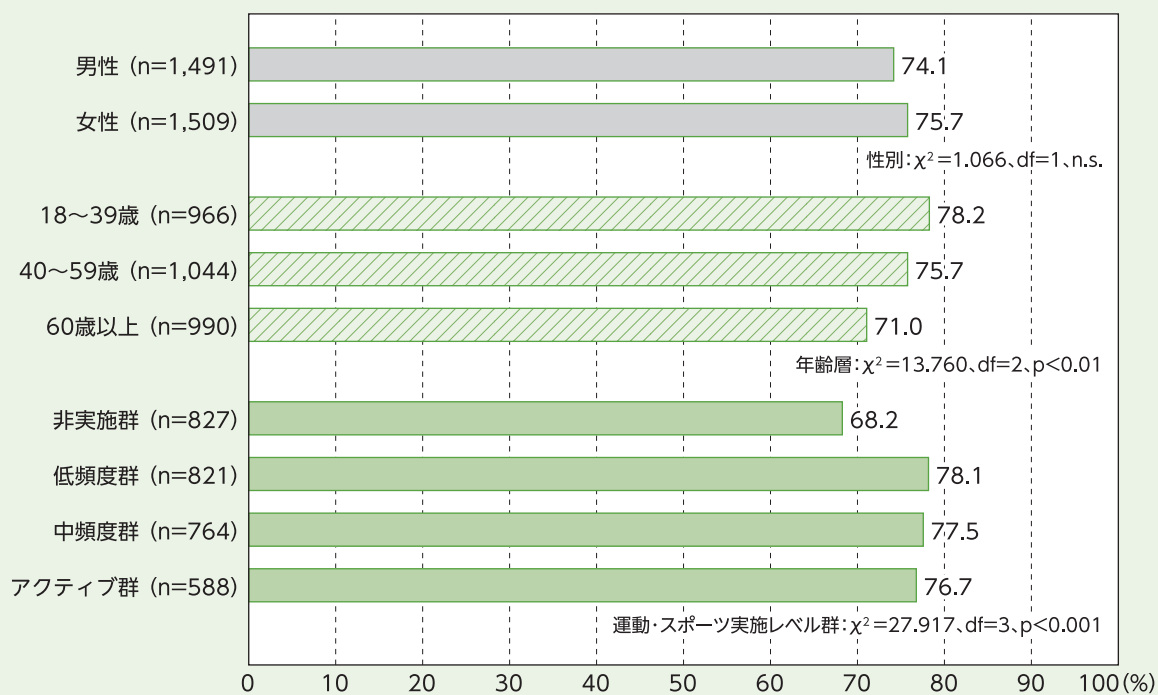
属性別にみたオリンピック／パラリンピック・イメージへの回答

オリンピックとパラリンピックのイメージへの回答について1カ所でも回答した者の割合を、性別、年齢層(18～39歳／40～59歳／60歳以上)別、運動・スポーツ実施レベル群(非実施群=レベル0／低頻度群=レベル1／中頻度群=レベル2・レベル3／アクティブ群=レベル4)別にみた(図D-2、図D-3)。性別にみると、オリンピック・イメージに回答した者の割合は男性74.1%、女性75.7%、パラリンピック・イメージでは男性65.2%、女性67.8%であった。オリンピック／パラリンピック・イメージいずれにおいても、女性の回答率は男性よりもわずかに高いが、統計的に有意な差ではなかった。また、パラリンピック・イメージへの回答はオリンピック・イメージへの回答と比べて少ない点も男女で同様である。

年齢層別にみると、オリンピック／パラリンピック・イメージいずれにおいても、年齢層が高くなるにつれて回答率が低くなる。オリンピック・イメージとパラリンピック・イメージの回答率の差をそれぞれの年齢層で比較すると、18～39歳で6.4ポイント、40～59歳で8.4ポイント、

60歳以上では10.6ポイントであり、年齢層が高くなるにつれて両イメージへの回答率の差は広がる。さらに、両イメージにおける18～39歳の回答率を100とすると、オリンピック・イメージにおける60歳以上の回答率は90.8であるが、パラリンピック・イメージは84.1となる。これらの結果から、60歳以上におけるパラリンピック・イメージの回答率が下がる傾向が確認でき、高齢者層にとってパラリンピックはまだイメージが浮かびにくいスポーツイベントであると推察される。

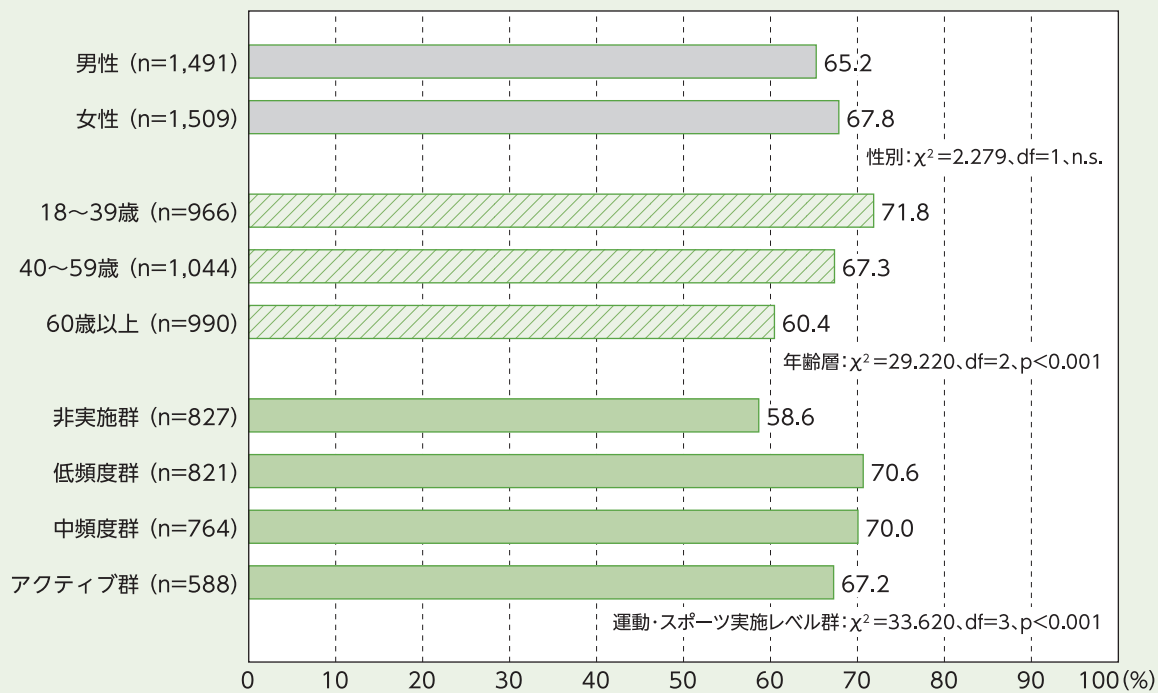
運動・スポーツ実施レベル群別にみると、オリンピック／パラリンピック・イメージのいずれにおいても有意な分布の偏りが確認された。具体的には、非実施群で回答しない傾向がみられ、運動・スポーツ実施者においては、中頻度群やアクティブ群よりも低頻度群の回答率がわずかに高かった。また、いずれの群においても、オリンピック・イメージの回答率はパラリンピック・イメージよりも高かった。



【図D-2】 オリンピック・イメージへの回答 (性別、年齢層別、レベル群別)

統計処理には χ^2 検定を用いた。

資料: 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016



【図D-3】 パラリンピック・イメージへの回答 (性別、年齢層別、レベル群別)

統計処理には χ^2 検定を用いた。

資料: 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

D-3 オリンピックとパラリンピックのイメージを特徴づける頻出語

オリンピックとパラリンピックがどのような語によってイメージされているかを確認するため、頻出語上位10語を抽出し、表D-1に示した。オリンピックとパラリンピックで共通して使用されている語は「スポーツ」「祭典」があり、オリンピック・イメージを特徴づける語としては「世界」「メダル」「金メダル」「平和」「国」などである。回答を個別にみると、オリンピック・イメージの典型は「世界最大のスポーツの祭典」や「平和の祭典」「国を代表する選手がメダルを競う」という記述で表現されている。

他方、パラリンピック・イメージは「障害」「努力」「車いす」「感動」「がんばる」「身体」によって特徴づけられており、個別の回答においては「障害者スポーツの祭典」「障害者のオリンピック」「障害をもつ人が努力している姿に感動する」「障害があがながらもがんばっている」といった記述が典型である。オリンピック・イメージでは上位にあがった「メダル」「金メダル」がパラリンピック・イメージにおいては頻出の10語には含まれない（「メダル」は19位、「金メダル」は29位）点も特徴的であろう。「車いす」をイメージする記述も多く、テニスやバスケットボールなど、「車いす」を使用して行う競技というイメージが共有されていると推測できる。さらに「がんばる」という語が上位となった結果もパラリンピック・イメージにおける特徴である。この語はオリンピック・イメージの頻出150語に

はあがっておらず、パラリンピックと同様にスポーツで人類最高峰のパフォーマンスを目指すオリンピック競技者にはほとんど使われない。つまり「がんばる」という語は、障害をもちながらも健常者と同じような、あるいはそれ以上の努力をするアスリートに対して人々がもつ代表的なイメージだといえる。

次に、オリンピックとパラリンピックのイメージにおける頻出語上位10語を性別、年齢層別にみた。オリンピック・イメージの上位10語を性別にみると、顕著な特徴はみられなかった。年齢層別にみると、「平和」という語が18～39歳では上位にない（13位）が、40～59歳では6位、60歳以上では4位であり、年齢層が高くなるにつれて順位を上げている。また、60歳以上においては「日本」や「感動」という語が上位10語にあがったが、40～59歳では「日本」が13位、「感動」が11位、18～39歳ではそれぞれ17位と21位であり、「平和」と同様、年齢層とともに順位が変動する語である。

パラリンピック・イメージの上位10語を属性別にみると、性別では、男性では18位であった「がんばる」が、女性では6位であった。「がんばる」は年齢層別の比較においても、各グループの特徴を示す語であり、18～39歳では13位であったが、40～59歳では9位、60歳以上では4位であった。

【表D-1】 オリンピックとパラリンピックのイメージ頻出語(上位10語)

順位	オリンピック・イメージ			パラリンピック・イメージ		
	抽出語	出現回数 (n=3,717)	%	抽出語	出現回数 (n=3,138)	%
1	スポーツ	441	11.9	障害	450	14.3
2	世界	406	10.9	スポーツ	241	7.7
3	祭典	312	8.4	努力	224	7.1
4	メダル	166	4.5	車いす	163	5.2
5	平和	160	4.3	オリンピック	138	4.4
6	国	144	3.9	感動	135	4.3
7	選手	143	3.8	祭典	117	3.7
8	金メダル	140	3.8	人	116	3.7
9	大会	116	3.1	がんばる	106	3.4
10	人	108	2.9	身体	91	2.9

注) オリンピックのイメージとして回答があった件数は3,717件、パラリンピックでは3,138件である。イメージの記述においては、たとえば「世界中のスポーツ選手が集まって金メダルをねらう」のように、一件の記述において頻出語が重複して用いられるため、合計は100%にはならない。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

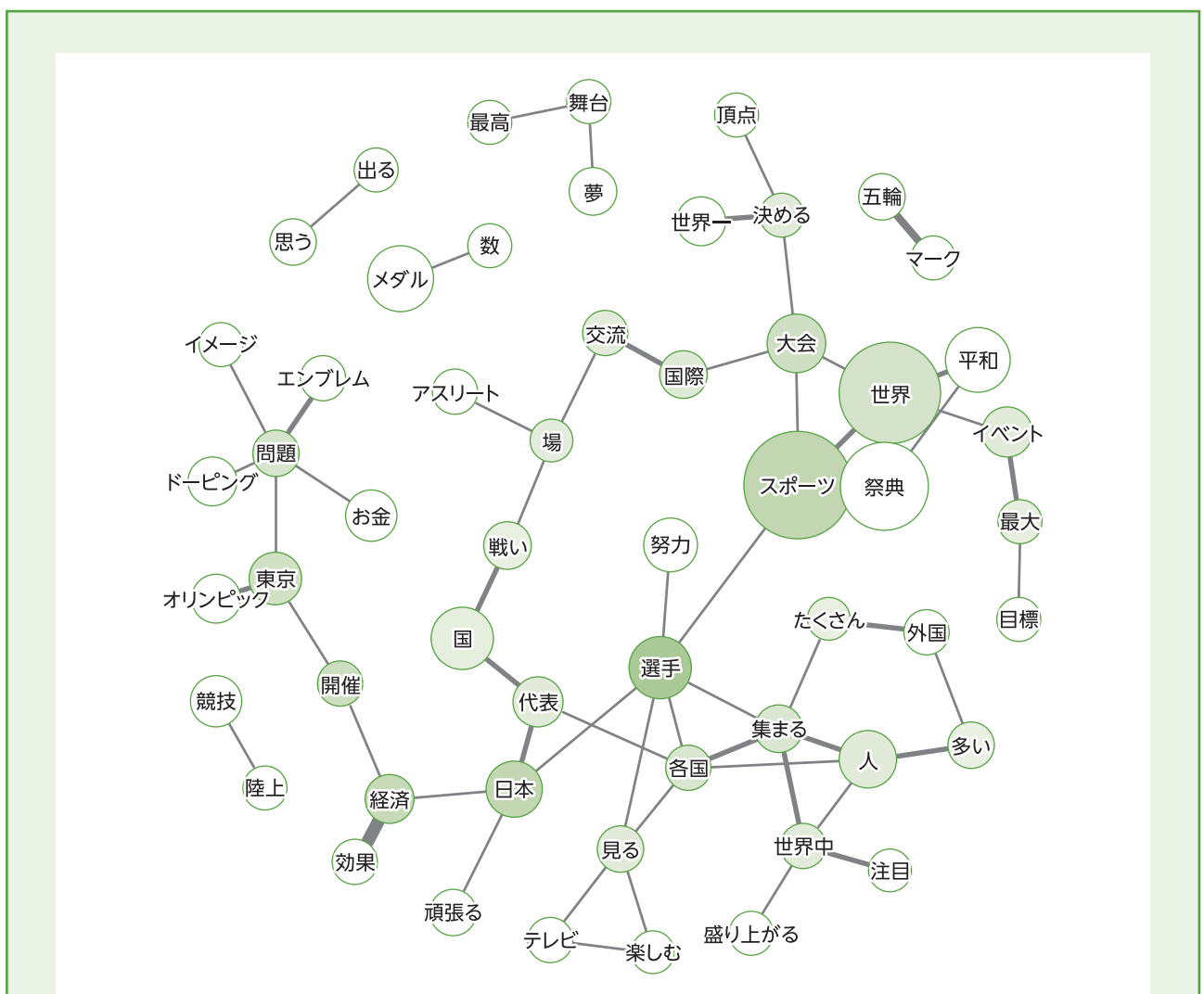
D-4

オリンピックとパラリンピックのイメージを特徴づける語の関連

表D-1ではオリンピックとパラリンピックのイメージを表す頻出語を示したが、これらの語と語の関連の強さを視覚的に把握するため、「共起ネットワーク」を図D-4、図D-5に示した。

オリンピック・イメージの共起ネットワーク（図D-4）をみると、「スポーツ」「世界」「大会」「祭典」「平和」が図の右側に配置され、かつ円が大きく色が濃い、あるいは

円を結ぶ線が太い。また、これらの語から線で結ばれたネットワークをみると、回答者はオリンピックを「世界」「最大」の「イベント」であり、「アスリート」が「交流」する「場」としての「国際」「大会」や、「世界一」や「頂点」を「決める」「大会」と捉えていると判断できる。図の下部には「各国」の「選手」をはじめとして「世界中」から「人」が「集まる」というイメージ群を見出すことができる。図の左側には



【図D-4】オリンピック・イメージの共起ネットワーク

注1) 分析にはKH Corderを使用した。

注2) 共起ネットワークとは「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだ」(樋口、2014)ネットワーク図である。円の大きさは出現数の多さを意味し、線の太さは共起の強さを意味する。

注3) 共起ネットワークにおいて、円の色の濃さはネットワークにおける中心的役割の度合いを、円を結ぶ線の太さはひとつの文章で使われている程度をそれぞれ表している。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

まとめ

本稿の冒頭で、オリンピズムやオリンピック・ムーブメントについて言及した。近代オリンピック復興の立役者であるピエール・ド・クーベルタンが提唱するオリンピズムの解釈には諸説あるが、その要素として「個人の卓越」「他者との相互理解」「国際平和」があるといえるだろう。これらの要素との関連で本調査の結果を考えるならば、オリンピック・イメージにおいては「アスリートの交流」や「世界中の人や各国の選手があつまる」といった「他者との相互理解」に近いイメージが回答者に共有されているといえそうである。しかし、アスリート個々人の能力の限界といった「個人の卓越」に関するイメージは想起されていなかった。むしろこうした「個人の卓越」に関する要素は、パラリンピック・イメージにおける「不自由な身体を乗り越える姿」「精神的な強さで人間の可能性に挑戦」「ハンディキャップの克服」といったイメージ群において強く確

認できたといえるだろう。オリンピックにおいては個々のアスリートの身体的・精神的卓越性は自明であり、人々の目はむしろ国際的な交流に向いているのかもしれない。パラリンピックにおいては、障害をもちながらもスポーツすることに未だ新しいメッセージ性があるため、人々のイメージ形成がアスリートの障害とその克服に焦点化されていると考えられる。

これらの結果から、オリンピック、パラリンピックいずれにおいてもオリンピズムの要素の一部を見出せたといえる。ただし、3,000人から得た今回調査の自由記述回答において「オリンピズム」あるいは「オリンピック・ムーブメント」という語は一件も出現しなかった。この言葉が今後の日本社会でどのように語られ、それに伴って人々のオリンピックとパラリンピックに対するイメージがどのように変化していくのか、見守っていく必要があるだろう。

<参考文献>

樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析。ナカニシヤ出版。2014

COMMENTS

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016

- 2020年の東京オリンピック・パラリンピックは、オリンピックだけでなくパラリンピックも盛り上がるかと思っています。私も含め、競技やルールが分からない人は多いと思いますが、これを機に知識を深めていきたいです。(男性 33歳 事務的職業)
- 東京オリンピックをとっても楽しみにしています。スポーツはあまり関わっていませんが、観戦よりも運営のボランティアなどでぜひお役に立ちたいと思っています。せっかくの東京開催なので、関心がある人には何らかの関わる機会を与えてほしいです。(女性 49歳 専業主婦・主夫)
- 東日本大震災や熊本地震のあとに行われる2020年東京オリンピックは、国の膨大な予算を使って実施されるので、被災地の方々は元より、日本人がこれからの日本に希望を持てるようなオリンピックにしてほしいと思います。(女性 56歳 パートタイムやアルバイト)
- 自身がスポーツに関わる仕事をしているので、是非2020年東京オリンピックを盛大に盛り上げ、成功させたい。ただ、自分に何ができるのか、どんなボランティアがあるかなど、不明なことが多いため、多く情報発信してほしい。(男性 44歳 サービス職業)